教育者としての小泉八雲

高瀬彰典

Akinori TAKASE

Discovering Lafcadio Hearn as a Teacher

［ キーワード：　教育論、想像力、英語教育、英文学講義 ］

（1）ハーンと西田千太郎

ハーンは「耳無し芳一」、「雪女」、「むじな」、「青柳の話」などの怪談の作者として有名であるが、同時に、松江城、宍道湖、出雲大社などを水墨画のように、素晴らしい英文で描いた日本探訪の文学者で研究家としても多くの業績を残している。彼は事象の背後に不可視な心霊を見る心眼で、神秘的な異界や不可思議な異文化を探究し続け、来日以降、日本の文化風俗を身を挺して研究し理解して、見事な文学作品に完成したのである。『見知らぬ日本の面影』、『東の国から』、『心』、『神国日本』などの一連の日本研究の著作は、英語の原文から多くの言語に翻訳されて、全世界に日本を紹介することに貢献した。ハーンの活動は多方面に広がっているが、彼の日本時代を特色づける教育者としての業績は従来あまり注目されて来なかった。彼は14年の在日期間で、神戸時代を除いて、11年余にわたって明治の日本の教育界に深く関わり、独自の教育理念で教授法を考案して英語教育の発展に尽力した。また幅広い膨大な読書量を駆使し自らの作家としての創作経験を取り入れた実に内容豊富で魅力的な講義によって、日本の英文学研究の基礎を築いた人物でもあった。

元来、ハーンは日本見聞録を記事にしてハーパー社に送るという特派員契約で来日したが、航路で横浜上陸後すぐに、同行の絵描きのウェルドンと条件があまりに異なって不利なことが判明し、憤慨して出版社と絶縁してしまう。苦労人であったハーンは、人への同情や共感の熱い気持ちを持っていたが、人からの裏切りには猜疑心が強く、権威者の横暴や不正や矛盾には後先考えず過剰に反応する頑固一徹者であった。特派員の仕事を自ら断った彼は、生活費のためにすぐに代わりの収入の道を探さねばならなかった。アメリカ時代より愛読していた英訳版『古事記』の著者であり、東京帝国大学教授でもあったB.H.チェンバレンに就職の斡旋を依頼し、島根県松江市の尋常中学校に月給百円の英語教師の職を得て、明治23年９月から翌年10月まで奉職することになる。松江の市民も生徒もヘルン先生と愛称して彼に親しんだ。アメリカ時代の艱難辛苦の生活から考えると、ハーンは人生ではじめて高収入と人々の尊敬を集める安定した地位についたのである。

西洋の先進技術を導入しようとして、全てを西欧人から学ぶために、多くの外国人を雇った時期は過ぎようとしていたが、当時の明治政府は依然として英語教育には外国人教師を必要としていた。当時の文部大臣森有礼が日本語よりも英語重視の考えを標榜した頃であった。英国を中心とした欧米崇拝の時代で、学校教育も英語でやらねばならないという極端な英語政策があった。当時の師範学校の教育も英語でやるべきと非常に力を入れていた。松江の尋常中学校でも、同じ日本人の先生が数学も英語も教えていた。教科書もほとんどが英語で書かれたもので、幾何学も代数も英語で書かれたものを使用していた。教科書はほとんどが原書であったが、数も少なく１冊か２冊しかないものをみんなで筆写していた時代であった。文明開化の鹿鳴館時代の余韻はまだ色濃く残っていた。欧米に追いつくために英語教育が強調され、日本語ではなく英語による教育のために、高給で外国人教師が多数採用された。しかし、布教目的の宣教師であったり、教師としての仕事や責任を果たさない問題教師も出ていた。

1850年生まれのハーンは40歳の時、すなわち、1890年４月４日（明治23年）にアメリカから来日して以来、人生ではじめて教職に就くことになった。アメリカ時代は新聞記者として生計を立てていたので、教師になることは大きな履歴の変化といえる。アイルランドでは親の離婚と大叔母の破産などが重なって、彼は幼少期の不遇な身の上のため、高等教育を受けるチャンスを中途で剥奪された。また、ダラムの寄宿学校在籍時に遊戯中に片目の視力を完全に喪失するという大変な事故に遭遇している。(1)　残った眼も弱視であったので、文学好きで読書が欠かせなかった彼は、終生失明の恐怖と戦う宿命を背負うことになる。その後、親族からも見放されて、ロンドンの元女中の家に身を寄せるように厄介払いされ、全くの天涯孤独の境遇で、無一文のどん底生活を余儀なく

された。さらに、19歳の時に追い出されるように片道切符でアメリカへ渡り、彼はニューヨークで浮浪者となって人生の辛酸をなめ尽くすことになる。しかし、文学への思いは消えることなく、ハーンは以前にフランスの寄宿学校で得たフランス語の語学力を頼りにフランス文学の研究や翻訳を手がけた。そして、厳しい生活環境の中で決して挫けることなく、日夜公立図書館や古本屋通いで努力し、全くの独学で英語教育や英文学の豊かな知識を身に付けたのである。文学研究と作家への思いを強めるなかで、最も身近で文筆によって身を立てる職業として新聞記者の職を得た。このような無類の豊富な人生経験が、ハーンに教育者としての独自の教育観や人間観を与えたと言える。正規の教育を受けずに独学であったハーンは、生来知識欲に溢れ、厳しい学者的側面と優しい教育者としての素質を兼ね備えていた。子供好きのハーンは観察力鋭く、緻密な感覚で小さな動物にも豊かな愛情を降り注いでいた。彼が叱っても生徒が悪い感情を持つことなく、かえって叱られるほどに親しみと懐かしさを感じさせる独特の人間性を有していた。特に困窮者や弱者に対する同情の熱い気持ちは、作家としてばかりではなく、教師としても生徒や学生の教育指導に反映され、多くの優れた人材を育て人々の信望と尊敬の的となった。

このように、イギリスやフランスの寄宿学校で非人間的なキリスト教教育を受け、親族の破産で学業を中途で断念を余儀なくされたハーンは、実は教育について特別な思い入れを抱いていた人物である。イギリスやフランスの威圧的で陰鬱な宗教学校で彼が受けた酷い教育と非人間的指導は、他山の石となって、日本での教師としての教授法に生かされていく。生徒の立場に立って、絶えず情緒や想像力を大事にする教え方は、精神的トラウマを受けた悲惨な宗教教育や西欧中心主義への反発から生まれた。日本での11年余の英語教師・英文学講師としての在職中に、彼は自らの教育理念や教育への情熱を真摯に実践し、明治期の青少年の指導に熱心に献身して数多くの実績を残している。幼少期での酷い教育と親族からの冷たい仕打ちは、彼にトラウマのようなキリスト教嫌いを抱かせ、非西洋としての異文化に強い憧れを覚えるに至った。来日への必然的な魂の渇望と来日以降の西田と松江の生徒との運命的出会いは、彼の人生に劇的な変化を与えた。

松江で教師として開眼するハーンの精神の軌跡を辿れば、西田の協力を得て、先駆的な日本理解者として日本永住を決意するに至った過程が明らかになる。西田の影響や協力がハーンの教師像形成や日本理解に大きな役割を果たしたことは、書簡や日記に如実に示されている。以前のアメリカ時代と異なって、一生の伴侶を見いだし、家庭や親族に囲まれて生活するようになった松江において、教師という職業は作家ハーンに新たな視点や論点を与え、日本理解の深まりと共に、彼は人間観や世界観について独自の思索を深めることになる。

教育者としてのハーンの日本理解の進展や考察の深化において、旧日本として伝統文化を体現する松江の意味は重要であった。教師と生徒の信頼関係を最も重視したという彼の教育観は、島根県尋常中学校と師範学校（1890, 9〜1891, 11）、熊本第五高等中学校（1891, 11〜1894, 11）、東京帝大文科大学（1896, 9〜1903, 3）、早稲田大学（1904, 4〜1904, 9）など約11年半にも及ぶ教職活動の各段階でのハーンの教師像に一貫して流れている。著名な教え子を輩出しながら、彼は日本でも各地に漂泊を続け活躍した。教師に対する価値観や信頼感が大きく揺らぎつつある現在、師に対する尊敬や信頼の念が力強く生きていた明治期の若者の姿や教育現場を、ハーンを通じて振り返ることも有意義であろう。教育者としての彼の卓見は、今日の荒廃した教育現場の問題に一石を投ずるものがある。生徒の側に立って想像力を喚起するために、情緒的な分かりやすい言葉で、彼等の心眼としての魂に語りかけようと努め、独自の教育理念から比類なき教授法を彼は考案した。

ハーンは明治23年（1890年）の４月に来日して、当時の西洋風の学年始めにあたる９月２日に、松江の尋常中学校（現在の中学1年から高校２年に相当）と師範学校（現在の大学教育学部に相当）に英語教師として赴任し、1891年11月15日に熊本第五高等中学校に転勤するまで14ヶ月間在職した。教頭の西田千太郎は公私にわたり親身になってハーンの世話をした。[(2)] 西田は松江の士族の家に生まれ、秀才ぶりを発揮し18歳で母校の尋常中学校の助手として５年間勤務したが、向学のため明治18年に上京して英米人について２年程苦労して勉学し、その後独学で心理、論理、経済、教育の文部省中等学校教員検定試験に合格した人物である。担当科目は英語の他に、自然地理学、世界史、数学などであった。西田は過去に過度の勉学のために病弱となり、明治30年に36歳の若さで結核で病死したが、熱心に生徒指導や学校運営に没頭していたため、松江聖人とも賞賛された人格高潔で優れた学識の人物であった。不評の前任者タットルの解任にもかかわらず、外人教師の招聘は西田の希望であり、籠手田知事の決断で実現した。頭脳明晰、博学、極めて人情家であった西田が29歳から36歳で逝去するまで、ハーンは着任以来相互に兄弟のような親密な交際を続けた。誠実に教師生活や作家活動のあらゆる面で協力し支援を続けたので、ハーンは終生西田に感謝し、友情と尊敬の気持ちを忘れなかった。西田がいなければ、松江でのハーンの結婚も永住帰化もなかったし、教師としても作家としても日本で大きな業績を残すこともなかったであろう。

松江時代を描いた来日第１作の『見知らぬ日本の面影』は、常にハーンの側にいて協力し、公私にわたって相談相手となった西田の存在があって実現したものである。英語教師でもあった西田が通訳しながら、周到なる注意と綿密な説明でハーンの松江や出雲の研究に寄与して、その後の日本理解に貢献した功績は大いに評価されるべきである。ハーンは心から西田を信頼し敬愛の念を持って接したので、日本の伝統文化理解や教職への傾倒に非

常に大きな影響を受けていた。恩義を感じたハーンは、来日第２作の『東の国から』を西田に献呈している。教師経験のなかったはずのハーンは、実は専門の教師よりも教え方も巧く、独創的な教育観を持っていた。記者や作家の経験から想像力や創作を重視した語学教育を実施して、教師として優れた資質を発揮し生徒の評判も良かった。西田は風采の上がらぬハーンの真価を見抜いていた。ハーンが英訳で『古事記』や『日本書紀』に至るまで読破していることに西田は驚嘆した。また、片田舎の村の取材に二人で出かけた時、老人に質問しては通訳に窮する答えばかりに出会うので、西田は他の場所へ行こうと提案したという。すると、すべて教育を受けた人は何処へ行っても同じ事を言うので、自分の研究の資料にはならないとハーンは答え、無教育で文盲の老人こそ古い日本の息吹を伝えてくれるので興味ある研究対象であると言ったという。(3)　西田は大変な学者先生が自分の学校へ来てくれたものだと感服した。このようにお互いに深く敬愛の念を持ち合う素晴らしい交友関係が生まれたのである。西田の病弱と不治の病を知ったハーンは、あの病を治す人がいるなら全財産を出しても惜しくないと思った。

アメリカ時代には全く縁のなかった教職に就き、ハーンが英語教師としてまた英文学教師として成功を収め、日本に永住を決意させるきっかけを作ったのは、献身的に彼の世話をした実直で好人物の西田千太郎である。西田は良き助言者として彼を援助したが、欧化主義全盛の明治の日本であったとはいえ、日本語の出来なかった彼が、老若男女を問わず、幅広く松江市民からヘルン先生と愛称をもって親しまれていたのは、ひとえに彼の人柄によるものであった。ところで、ヘルンという呼び名は実は尋常中学校への採用時に、文部省の辞令書に事務官がハーンとすべきところをヘルンと間違った発音表記を記入したことによる。ハーン本人もこれに抗議するでもなく、むしろ日本に来てヘルンと呼ばれるのを喜んでいた。多くの異文化探訪の経験を持つ彼にとって、その土地の風習や人情に触れるためにも、ヘルンの呼び名は正に脱西洋への呼びかけであり、ヘルン先生は新天地で教職に臨む新たな機運への呼びかけでもあった。ハーン自身も日本の生徒達の教壇に立つことに想像以上の喜びを感じるようになっていた。日本語の全く出来なかった彼は、苦労しながら生徒達との交流を深め、教師としての多忙な日々を充実した気持ちで過ごしていた。

（2）松江時代、英語教師ハーン

松江との出会いはハーンにとって、人生最大の幸運で日本永住の大きな絆となった。急変しつつあった新日本の明治期でも、松江は依然として古風な旧日本の名残を色濃く残し、奇妙で風変わりな神社や寺院も多く、彼の興味をそそるものがあった。松江では学校の生徒も先生もみんながハーンを暖かく迎え、彼は心から信頼しうる愛情と尊敬を分かち合うことができた。生徒がハーンの自宅を訪問した時は、出来るだけ簡単な単語を使いながら会話し、分からない単語を使う場合は、辞書を引きながら身振り手振りを交えて意志疎通に努めていた。特に、松江の職場を退職して後も続けられた西田千太郎との交友は、彼の教師としての優れた資質を引き出す重要な出来事であった。松江での英語教師の生活は、来日して最初の著書となった『見知らぬ日本の面影』に収められた「英語教師の日記から」に多くの逸話となって記されている。教育勅語の奉読の模様や明治日本の教育の功罪を記述し、ハーンは明治日本の教育現場に直接関わりながら、当時の若者の生活と精神状態を克明に記録している。

ハーンが教師として学校や生徒を見る眼は、極めて正確で客観的なものである。日本の町並みに溢れる漢字やひらがなの神秘的な視覚的効果に注目し、日本の生徒の図画の才能が日本語の視覚的教育や記憶に基づいていることを鋭く洞察している。綿密に整備された学年歴や松江城広場での壮観な運動会にも彼は深く感銘している。尋常中学校の職員室の描写などは、松江では西田や他の教員とうまく調和して、英語教師としての生活に馴染んでいたことを示している。(4)　他の教員とも共感をもって、ハーンは授業の合間に煙管で一服し、一杯のお茶で疲れを癒すのを楽しみにしていた。また、疲れて何も喋らない時でも、この当時の彼は暗黙の共感を他の教員と分かち合うことができた。彼は黙って煙管をくわえ、柱時計の音に耳を傾けて充足した時を過ごすことができた。後の熊本や東京の職場での孤立感や焦燥感とは全く異なった彼の姿が、松江の教師生活の中に散見できる。したがって、松江時代を描いた『見知らぬ日本の面影』は、ハーンの日本観を知る上で重要な作品であり、冷静な客観性と優れた描写力で未知の異文化世界を見事に把握する彼の作家的力量を示している。

ハーンは島根県尋常中学校で週20時間、及び師範学校で週４時間の授業を受け持ち、会話、リーデング、英作文、聞き取りを担当した。日本語が出来なかったハーンは、尋常中学校の生徒達に英語を教える事の困難さを痛感した。しかし、彼は常に自ら信じる教育理念を実践し、難しいことでも生徒を几帳面に指導し、黒板に綺麗な絵を書いて分かりやすく親切に説明した。絵の非常に上手いハーンは、手早く黒板に書いた。彼の絵画の才能は、アメリカ時代に新聞や雑誌に自らの漫画やイラストを挿入して、記事に面白味を持たせようと工夫した頃から既に発揮されていた。『妖魔詩話』に描かれた異界の幽霊の姿は、見事な出来映えで、来日以降も彼の画才がかなりのものであったことを示している。英語の字句や類語も分かりやすく絵を描いて見せるように分析したり区別して彼は解説に努めた。また、自由英作文の授業を重視したハーンは、生徒達の作文内容の画一性と没個性に当惑した。彼は生徒達の想像力の欠如と画一的発想に危惧の念を抱いた。想像力を育成して独創性を発揮させるために、彼は親しみやすい作文のテーマを与え、正直に自

分の言葉で自分の考えを簡単な英語で述べることを生徒達に求めた。ハーンに促さて生徒達は、自分の感情や日常生活について率直に考えるようになった。

『旧師小泉八雲先生を語る』によれば、週24時間はかなりの重労働であったが、月給百円は当時としては校長よりも高給で、県知事に次ぐものであった。(5) 会話の授業では、30人程のクラスで生徒を順番に呼んでハーンが英語で話しかけ、会話練習を行った。授業中生徒が騒がしくなると、教壇を鉛筆でコツコツと叩いて教室を一瞥し、"Boys, boys, don't talk so much." と叱ったという。リーデングでは、同僚の西田千太郎と同じ教科書を使って、生徒に順々に音読させ発音の指導をし、間違った発音は板書して繰り返し読ませるという発音練習に重点が置かれていた。日本語を解さなかったハーンは、訳読式授業でなく、クラス全員で英文を音読する授業を進め、感情を込めて単語を発音するという実践的な指導を行った。英作文の授業では、自由作文で生徒は与えられた簡単なテーマ、すなわち、「宍道湖」、「蚊」、「酒」、「蛙」、「雛祭り」、「民芸品」などの日本に関するものについて、毎回短い英文を提出して指導を受けていた。生徒が書いたものをハーンが綿密に添削して返し、面白いものはクラスの前で朗読された。生徒の英作文には親切丁寧な添削をして、さらに詳細な批評まで記入したという。成績優秀者には『ギリシャ英雄伝』などの書物を賞品として与えた。作文を通じて彼は生徒と語り合い、東西の思考様式の相違を学んでいた。生徒達の作文の特徴は、個性がなく文体までもが皆似ていること、想像力に欠け独創性がないこと、教訓的暗示に縛り付けられて発想の自由がないこと、教訓的な故事や逸話を当然のように皆が引用しようとすることであった。

また、ハーンは生徒を可愛がり、多くの外国人教師がキリスト教を信奉していたのに対して、彼は神仏を尊敬して日本古来の風俗習慣を尊重したので、生徒や市民にも評判が良かった。(6) 聞き取り教材では教材の選択に細心の注意を払って、生徒に親しみやすい英訳本の竹取物語や日本の昔話などを使用した。ハーンが読んだ英語を生徒が黒板に板書し、訂正した英語を生徒がノートに書き写した。崇高な感情を喚起して教育するために、時にはロングフェローの詩などを彼は書き取らせることもあった。授業中は教科書も原稿も持たず、何も見ずに一字一句の間違い無しに、彼は書取の英文を繰り返し暗唱したという。教材を完全に暗唱できる程に自分のものにして教壇に立っていたハーンの教師としての真摯な姿勢を見ることが出来る。

ハーンは草木から小さな虫や鳥に至るまで弱小なる命を終生愛していたが、教え子に対する彼の愛情は人一倍深いものがあった。安い学費で精神的教育が行われているとはいえ、日本の生徒達は、貧困の中で欧米では生きていけないような粗食に耐えて、難解な西洋の語学や科学に関する苛酷な勉学に心身共に没頭していた。粗末な衣服と、真冬でも火鉢一つという厳しい学習環境で体力を消耗する教え子の身の上を彼は非常に気遣っていた。「英語教師の日記から」の終結部では、勉学に殉教した横木富三郎という生徒の死を哀感を込めて述懐している。(7) 優秀であった横木の死は、彼の教え子への愛情と共に、読者に感銘を与え、詩的哀感を醸し出す名文となって述べられている。ハーンは若くして病死した横木少年の純朴な心を描写して読者に感動さえ与える。教え子には、尋常中学校から東京帝大まで教えを受け、ハーンの作品の翻訳を手がけ、自作の俳句を発表した英文学者の大谷正信、陸軍大佐の藤崎八三郎、東大教授の石原喜久太郎などがいた。特に優秀な生徒達であった石原、大谷、小豆沢、横木については、彼は大いに彼等の健康に気を使って指導していたのである。ハーンが横木の死を知るのは、熊本へ転勤した後のことであったが、その早すぎる死を悲しみ、学友の小豆沢の手紙による報告を基にして、彼は惜しむべき逸材を追悼して作品の中に書き残したのである。立派な才能の持ち主が成熟を待たずして死んでしまい、下劣狡猾な輩があらゆる危険を回避して生き延びているこの世は、ハーンにとって不思議にも残酷にも思えた。寵愛した教え子の大谷に横木の死を悼み、あまり勉強しすぎるなと忠告している。体が悪くなればいくら頭が良くても、この世では何も出来ないと健康を愛情豊かに気遣っている。

自分自身も背が低く小柄で片目で苦労していたため、彼は日本人を妖精のように小さくて神秘的な存在だと親近感を持って感嘆し、また、小さな動物、虫類にも心からの同情を抱き、弱者や貧困者を愛した。激しい勉学の負担に耐えられず、病に倒れ死んでゆく純朴な教え子たちの悲惨な宿命は、小柄な彼自身の幼少年期の苛酷な運命を想起させ、彼を心から嘆き悲しませたのである。ハーンは生徒に対して師弟関係よりも兄のような親密な関係を求めた。学生の食生活や栄養問題に触れて、西洋の学生が肉や卵などの栄養たっぷりの食事をして勉強出来ることを、乏しい米やお粥でやろうとしているとハーンは案じていた。(8) 学生の体力は充分ではなく、高等教育の激しい勉学に耐えうるだけの充分な食事を与えられていないと危惧している。また、彼は生徒達から"Sir"と呼ばれて、支配者のように崇められるのを好まず、単に"Teacher"と呼ばれて兄のように慕ってくれるのを望んだ。このように、学問だけでなく、心から親密に教え子の健康や将来の行く末までも心配していたハーンは、現在ではあまり見かけられない希有な教育者であったことが分かる。生徒達の想像力や個性の欠如を憂い、貧弱な食生活と脆弱な体力を見ると、日本が属国にならずに如何に西欧列強と渡り合っていくかについて、教育者としての彼は真剣に懸念していた。

(3) 教育会での講演「教育における想像力の価値」

ハーンは尋常中学校着任後２ヵ月の1890年10月26日に早くも島根県教育会に於いて「教育における想像力の

価値」と題する講演を行って、教師の教育指導と時代精神への示唆に富む内容を発表し、自らの教育観を語った事は特筆すべきことである。(9)　県教育会での講演には、ハーンの教育者としての信条が見事に披瀝されており、病弱の西田は喀血の病を止血剤で押さえてまでハーンの通訳を行って、遂に途中で喀血し悲壮な光景であったという。(10)　日本で初めて教職についた彼が、早くも教育に対する自らの理念を述べることを求められたのである。その論旨は時代の変遷を経た現在でも、充分通用する不変の道理を説いた立派なものである。最後に学ぶべき事柄を最初に学んでいるという教育の欠陥を指摘し、日常生活に必要な名詞、代名詞、前置詞、動詞などの単語を学んで後に、最後に各単語の定義や文法を覚えるのが自然な教授法だと説く。しかし、日本の生徒達はまだ単語も知らないのに、名詞の定義を教授され、各品詞の定義を理解しないうちに文法法則を教えられていると彼は難じている。そして文章構成法の規則が何を意味するか分からないうちに、生徒達は難しい文法規則を無益に暗記していると彼は断じた。想像力を働かせることなく、機械的な記憶力の訓練に終始している教育の不毛性に彼は警鐘を発したのである。単に機械的に事実のみを教える教育の不毛性を論じ、事実だけを学ぶのではなく事実の起こる所以を学ぶ必要性を訴えた。

心服するハーバート・スペンサーの総合哲学を援用して、変化する特性を有する細胞は、幾千万年にわたって幾百万もの変形物体を進化によって造形し、進化は形態のみならず精神も進化し、心の同感や高尚な感情を生みだし文明を発生させるのであるとハーンは説明する。この精神の進化が想像であり、思考を頭脳に描き現すことである。諸学問には想像力を必要とするものが多く、想像力を欠けば真の研究も不可能となる。体力の虚弱は許せても、想像力の思想のない者は決して役には立たないと彼は断言している。したがって、教師たる者は生徒に想像力、すなわち心の創造力を養成するように教授する必要がある。

ハーンは想像力を伴わない事柄だけを教える教育の無益を訴え、事実と事実の関係に止まらず、事実の起こる所以や由来を完全に理解し研究するには、想像力を働かせて心に描いて知る必要があると説いた。すなわち、人類の支配的学問において、想像力を必要としないものは存在しないからである。教師は生徒の想像力の育成や啓発に常に心がけねばならない。教科の好き嫌いも生徒達の想像力の有無に深く関わっている。想像力を働かせて興味を感じたことは、一生の記憶に残る素晴らしい生命的な知識となる。５歳の時に感銘を受けた絵画が、今なお色鮮やかに心に生きていると自らの体験を語り、生徒の心に絵を描いて見せるように、面白く分かりやすく教える技量や力量を教師たる者は身に備えるべきだと彼は論じている。このように重要な想像力の機能を生徒に育成するためには、常に生徒に質問をさせるように教室で指導することである。

また、教師は質問に丁寧に答えるように務めて、常に生徒の質問能力を高めるように心がけねばならない。そうすれば、単に記憶力の増進に止まらず、同感の情や高尚なる感情を植え付け想像力を養成することになる。教材の進度を気にして、執拗な質問を嫌がったり怒ったりする教師は失格である。なぜなら、質問は想像力の源であるからだ。教師は同感を伴った指導によって、生徒の想像力を鼓舞し学問への興味を育成するべきである。「この花が赤くてあの花が黄色いのは何故でしょう」というような、たとえつまらない事でも、生徒の最も質問したい事であれば、その質問を否定したり拒絶するような狭量な教師ではなく、本当の教師たる者は心を広く受け止めて、出来る限り平易に絵を描いて見せるように説明すべきであると彼は力説した。教師の威厳を損するような詰まらない質問でも、心狭く拒絶するべきではない。既定の進度を守るために、生徒の質問を避ける態度は、不充分に教科を教えるよりも、完全に半分の教科でも教えた方が実り豊かというものである。単語を語源的に解剖したり、類語を区分したりして、生徒の理解のレベルに合わせて丁寧にハーンは教え、自らの教育理念を実践した。学者然として上から生徒達を見下ろすのでなく、苦労人で絵の得意だったハーンらしい生徒の目線に立った教育論である。

明治期の日本は、教育内容や理念、教授法などすべてについて欧米の規範を模倣し、民族性や風土を無視して欧米の教科書をそのまま使用していた。このような現状では、教師が欧米の知識を良く理解し日本の生徒達の資質に適合させて、彼等の想像力に訴えかけるようにして、教育効果を充分考慮して教育しなければならないと彼は注意を促している。このような勧告は現在の日本の教育界にも依然として当てはまる卓見である。日本の国民性に適合しない外国式の教授法や思考様式を無反省に導入することは、強制的に生徒の想像力の枯渇を招来し、単に無意味な事実の羅列と記憶力による暗記教育だけに終始してしまう危険がある。ハーンは初等教育についても、生徒の才能の育成が教科書だけに頼ってなされるべきでなく、絶えず自己精進して教授力を高める教師の技量と力量の有無が、生徒の想像力養成を左右すると断言している。すなわち、教育を構成するのは、教科書ではなく教師の才能と想像力である。教科書を教えるのではなく、教科書で教える教師こそ最も望まれる人材である。外国語の学習には語源的で民族的背景から丁寧に教えて、洞察力をもって生徒を見つめ、学問の世界の面白さに引き込むように授業しなければならない。

ハーンによれば、事物の根源を探究し、学問に精進できる人材育成のためには、想像力で心を豊かに育み自己の独創性を表現できるように指導して、将来の学術研究に臨む探究心を養成することが肝要である。ニュートンやダーウィンに想像力がなければ、偉大な歴史的業績は達成できなかったであろう。想像力育成のためには、教育において教師は生徒に頻繁に質問し、自分の意見を発表することを奨励することである。５歳の子供の発した質問でも、学者が千年かけても解明できないことがある。

答えられない質問を冷笑して葬り去るのではなく、教師は生徒の疑問には親切丁寧に答えなければならない。分からない場合は正直に述べ、出来る限り調査して生徒の不利益を防止すべきである。「神の意志ですべては決められた」というような宗教的な答えは、生徒の興味や探究心を阻害し、発明や発見への想像力の発達を止めてしまう。宗教は学校ではなく家庭や教会で教えれば充分である。想像の芽を摘み去ることなく、同感の情のある応答によって、想像の発育に充分の自由と栄養を与えることが肝要である。特に、子供の頭脳は新鮮で鋭敏であるので、指導次第で良くも悪くもなり、その影響は一生涯消えるものではない。不注意な教師の些細な言動が、生徒の一生の成否を決する場合もある。ハーン自身が単なる知識の教師ではなく、生徒の心の想像力に深く関わる魂の教師であることを求めていた。

日本人は古代ギリシャ人のように美意識や想像力に富んでいるにもかかわらず、日本の国情に合わない西洋式の教育法を模倣して、欧米の書物を至上のものとして教室で使用するために、生徒の自由な想像力は萎縮し、単なる生硬な知識として暗記の対象となり、教育は生徒の記憶力だけを働かせることに終始している。外国から目新しい方法論が紹介されると、すぐに金科玉条のように飛びつき、国情や対象の相違を考慮せずに、強引に採用して熱しやすく冷めやすく飽きてしまう教育施策に彼は警鐘を鳴らしている。この弊害を避けるために、教師は西洋の学問をよく把握して、教科書だけに頼らず、生徒の学習に適応するように教授すれば、生徒達は西欧の知識を自分自身のものとして吸収し、優れた自己の文化創造に寄与するものとなる。したがって、教師は西洋模倣の教科書に依存することなく、自分の知っていることは教科書にないことでも面白く簡潔に告げて、生徒の想像力を育成するように、教育者としての技量と力量を培う努力を怠ってはならないと彼は力説した。今日でも充分通用する古くて新しい議論である。

西欧化に走る新日本を嫌い、旧日本を讃美するハーンは、時代の趨勢に逆行するような頑固な日本贔屓の文化的保守主義者であった。文化的保守主義と進化論的理念が合体した講演内容は、彼の確固たる教育理念の表明であり、終生基本的に不変であった。心の進化は情緒の発達であり、想像力の育成は文明の発展をもたらす。旧日本の伝統文化と新日本の行く末に対して含蓄に満ちた提案をして、彼は明治日本の国家的課題を見事に論じている。西欧の学術を日本に適応させて自分のものとし、西欧を凌駕する文明を創造して、西欧に自国文化を輸出することも不可能ではないと彼は説く。

ハーンによれば、教育における想像力の存在は重要である。質問と答えは想像力の出発点である。問いを発するには好奇心や興味が前提として必要であり、教師は子どもに関心を持たせるような説明や対話に心がけるべきである。教師たる者は何事も面白く教えるべきであり、教科書に頼ってマニュアル通りに教える機械的教育よりも、その効果は遙かに甚大である。疑問や質問を発する好奇心を奨励するために、教師はあらゆる問いを何でも受け止め、生徒との交流を維持すべきである。教師としてハーンは教え子の訪問には几帳面に対応し、常に対話を積極的に持ち、分かりやすく説明することを心掛けていた。中でも、ハーンは想像力を伸ばすために、英作文教育を重視した。完全無欠の綺麗な英文を生徒に書かせるよりも、独創的な思考力を表現している内容のある英文を彼は高く評価した。日本の生徒の想像力の欠如を是正し、紋切り型の思考様式から解放された独創性を養うことを目標においていた。英作文の指導を通して日本の生徒の貧弱な想像力の有様に接したハーンは、正直に思ったままに自分の考えを述べ、自分の生の感情や日常生活の習慣や身のまわり事物を自分で独自に考えることを教室で求めた。

彼自身が西洋に日本を紹介する著述に際して、生硬な論文調の作品ではなく、西洋の読者の心にまるで日本にいるかのような感覚を与えて、単に外部からの観察者ではなく、日常生活の中に入り込んで日本の思考様式で考えているかのような感覚を生み出す事に努めた。これは日本でのハーンの著述の基本方針であった。

このように、松江での教師生活では、英作文や英会話の授業を通じて、ハーンは日本の生徒の心に触れ、自宅にまで出入りする生徒と交流を深めていった。天長節に天皇の写真に向かってお辞儀をしたハーンの態度が、前任者タットルとはまるで違っていたことに生徒達は驚く。前任の英語教師は宣教師であり、キリスト教以外の信仰を持つ日本人を野蛮人と蔑視し、生徒にも西洋至上主義を公言していた。この牧師は授業中にキリスト教を尊敬しない者を卑俗で無知な人間と決めつけ軽蔑した。休み時間になると教室で寝たり、時には横になったままで授業をしたので生徒も憤慨し非常に不評であった。したがって、教師として不適格であるということになり、学校はこの牧師を明治23年７月に中途解雇したという経緯があった。元来、キリスト教嫌いであったハーンにとって、前任者の教師失格の話に溜飲が下がる思いであった。前任者こそが卑俗で無知な野蛮人のキリスト教徒であり、天皇と祖国のために貢献することは社会的義務であると彼は生徒に向かって説く。さらに、天皇や祖国を軽視する悪意の言葉には義憤を持って応じることが臣民としての義務であると力づけるかのように「英語教師の日記から」の中で述べている。(11)

献身的にハーンの世話をした小泉せつを伴侶にしたことは、松江での幸福を決定的にし、貞淑な日本女性に信頼しうる心の拠り所を得て、母性への思慕と畏敬の念は夫人への愛によって具体的に結実する。結婚問題は彼に国籍を意識させた。家庭を維持し権利や財産を保持するために、婿養子として日本に帰化して日本国籍を獲得し、妻や子供を昔の自分のような不幸に陥らせないことを願った。

しかし、松江の寒さは熱帯志向のハーンには耐え難い地獄であって、寒気に対する恐怖が松江から１年程で去ることになる大きな理由であった。酷寒の冬の間、彼は

厳しい寒さのために体調を崩しながらも、教師としての責務を全うするために真面目に出勤した。病気でやむを得ず欠勤した場合は、授業に穴を開けたことに西田や生徒達に大変な責任を感じていた。病気中でも英作文の添削をするので答案を見せてもらいたいと西田に連絡したりしている。

冬の寒さに閉口し温暖な土地を求めて、また小泉せつとの婚姻によって扶養すべき家族や親族ができたこともあり、ハーンは月給２倍という条件で、明治24年11月にチェンバレンの世話で気候も穏やかな熊本第五高等中学校（現在の高校３年から大学２年に相当）に転勤することになる。多くの人々に見送られて旧日本の土地を去るが、その後、松江は心の故郷としてハーンにとって忘れられない場所になる。松江を去ったことを後悔し、幾度か山陰地方を旅し永住の地として考えることがあった。

松江時代の初期の熱狂的な日本讃美の後に、熊本、神戸、東京へと移り住むに及んで、幻想の国への夢が破れ現実に直面して、ハーンは日本理解を方向転換することになったと従来考えられてきた。しかし、彼の楽園や熱帯志向は彼の異文化受容の思想や激しやすい感情のギリシャ的ラテン的資質と深く関わっている。彼の日本理解の方向性は松江時代に確固たるものとして出来上がっていたのであり、激しい感情の起伏に突き動かされて、自虐的で被害妄想的な言葉を投げかけて、西洋と日本の狭間の様々な問題に、外国人教師、作家、評論家、さらに時代を洞察する先覚者として苦悩することはあっても、来日以来14年間、死ぬまで頑固一徹で一途な彼の日本観の基本は不変であった。

（4）熊本時代、教育改革と学生指導

熊本第五高等中学校では１週間に27時間の授業を担当し、多忙な環境で1891年11月から1894年10月までの３年間在職した。当時の熊本は松江と正反対で、急速な近代化で軍都に変貌しようとしていた。夢中で教師の職務に献身していた松江時代と異なって、熊本でのハーンは日本の教育の装飾的で形式的な制度を鋭く洞察するようになる。教育制度ばかりでなく、教科書の内容や選定、教育方法の問題、過激な西洋化と日本のアイデンティティーの問題など多方面にわたって鋭い批判的見解を彼は述べるようになる。

1891年11月30日の西田宛の書簡では、熊本は面白味のない都市だと不満を述べるが、学生は勉強熱心で品位があると最初は好印象を持ったことを伝えている。[12] ここでも、前任者は宣教師であったので、英作文や英会話の指導もせずいい加減な教育をしていたペテン師だと彼は厳しく非難している。学校で採用されていた英語の読本を使用せず、会話と英文学の講義に切り替えたと述べ、読本は学生には理解しがたいジョージ・エリオットやディケンズの小説であり、英会話の本も怠け教師が使うようなものであり、無用で無益のものだから使用を止めたと言っている。また、学生の英作文能力がまったく駄目だと分かってディクテーションで書取練習させることにしたと教授法を細かく報告している。

熊本は古い日本の伝統文化を捨て軍備増強に邁進する西洋化の急先鋒であった。そして、松江時代よりも年長の学生を教えたため、以前のような親密な交流もなく、ハーンは熊本の町も学校にも幻滅を感じ始める。しかし、実際には、１年程の滞在期間の松江に比べて、熊本では３年程教えていたので、数多くの卒業生に関わっている。その間の事情は「九州の学生とともに」に書き残されており、中でも、漢学の先生であった秋月に深い敬愛の念を抱き親しく交流した。[13] 校長の柔道家加納治五郎もハーンの心服した人物であり、彼は大いに自由な授業をすることを認められていた。

松江尋常中学校の教え子大谷正信への1891年11月付けの手紙では、熊本は松江程美しくないと不満を漏らしているが、第五高等中学校の立派な煉瓦造りの建物に驚嘆し、学生の出来も申し分ないと記している。同年12月付けの手紙では、クラスで首席の成績を褒めた後で、将来を嘱望されながら勉強しすぎで急逝した横木の轍を踏むなと大谷の健康を気遣い、健全な身体なくしては精神は明晰でありえないと忠告している。1892年１月22日付けの手紙では、大谷の英文の出来について、松江で教えていた頃よりは上達したが、完全なる英文にはまだ数年を要すると文法的な説明を加えながら、細かく訂正し誰でも間違いを恐れずに書き続けて上達するものだと励ましている。

熊本での教育は松江ほど簡単ではなく、尋常中学校から高等中学校へと学校のレベルが上がり、その上一週27時間を全く教科書を使わずに、彼は授業を行わなければならなかった。その中にはラテン語やフランス語まで担当教科に含まれていた。さらに、学生の語学力も予想よりも貧弱であり、授業での対応を迫られていた。有名な物語を簡単な英語で書き換えたり、書取や簡単な英作文を学生に課した。松江と同じく、熊本でも学生の自主性や独創性の欠如には彼は困惑している。学校側は徐々に実用的英語の時間ばかり増やし、理論的な学問内容の授業を減らす傾向があった。板書することも多くなり負担は大変であったが、熊本で担当した英会話、英作文、文学講義のクラスでは、むしろ教科書なしの方が学生達にとって授業効果が高かった。

ハーンは授業には充分の準備をしていた。毎回、紫色の風呂敷に手帳と辞書を入れて教室に入り、時折手帳を確認程度に見ながら、ゆっくりと講義し難しい表現は黒板に書いたり、絵で説明したので学生は筆記しやすかった。英作文では、「文学で永遠なるものとは何か」というテーマで書かせたり、簡単なスピーチをした後で、内容について自分の英文でまとめさせたりした。学生の英作文の特徴は簡単な単語よりも難しい単語を好み、短い文よりも複雑な長文を使いたがり、短い慣用句を理解しないことである。また、「人は何を最も永く憶えているか」というテーマでは、不幸なことよりも幸福だったこ

とを永く記憶するという意見よりも、最も辛い事件の悲しみが永く記憶に残ると答えた作文に同感したのは、辛い過去を持つ彼自身の偽らざる率直な感想であった。

口頭と板書による教育は、本に頼らずに英語表現に集中出来るので、短い授業時間の中で英語で思考して英語で表現する教育方針に基づいて、ハーンは先進的な教授法を考案し自ら実践したのである。作家的見地から、彼は書くことの指導に熱心で、聴解練習と同時に書き取り練習を合体させた英作文練習を生徒に課していた。また、彼は特に日本人に馴染みのない動詞と前置詞の連語や動詞の語源を少しずつ説明することを心がけた。このように、学校と学生達の現状を考慮して、彼は新たな英語教授法を考案せざるを得なかった。島根県の教育会での講演「教育における想像力の価値」の中で表明した教育理念をさらに熊本でも実践し、その効果を高める授業方法を彼は西田に細かく報告している。文部省の官僚主義的な検閲で不要な訂正や挿入が加えられて、立派な内容の読本でも学生の好みに合わないものになっていると難じている。現行の教科書を使わず教科書制度を批判したハーンは、現在の文部行政や官僚主義への批判を先駆けたような先見の明を持っていた。

松江と同様に熊本でも学生の想像力の欠如に彼は不満を投げかけている。また、仮に想像力を持っていた場合でも、日本的想像力を刺激できないために、英語英文学の教育を非常に難しいものにしていると彼は看破している。西洋的想像力を全く持たない学生達に英文学を教えることの無益さを痛感し、習得困難な教科である以上、英語英文学は言語習得能力に優れた学生にのみ教えるべきだと主張している。英語習得をすべての学生に強制することは、国家的損失であり、全く無茶苦茶な教育方針だと彼は苦言を呈している。中国の漢文の学習だけでも西欧の言語６カ国語の学習に匹敵する程に難しいのに、学校で３カ国語を勉強することを課していることの無謀さをハーンは批判している。森有礼の英語化政策の不可能性を痛感し、実用的レベルに達しない一般学生に、無理に外国語学習の負担を強いるのではなく、語学習得能力に優れた者だけに教育すれば良いとハーンは考えていた。苛酷な勉学に倒れ死んでゆく学生がいるのは国家的な教育施策の失敗であると言う。また、貿易商人や金満家は子弟を直接外国の学校へ留学させるのが最善だと説く。

すなわち、ハーンによれば、日本の学校教育の内容そのものが全く装飾的で実際的でないため、大学を出ても何ら実用的な役に立たず、卒業生の四分の三が社会に無用の人材となっている。したがって、科学的哲学の重要性は、不毛の論理学や形骸化した倫理学よりも遙かに大きい。さらに、日本の学生の乏しい語学力では作家の文学を味読できないし、詩と散文の区別さえできないと現状を危惧している。このような現状を考慮して、文学の指導に熱心で厳格であったハーンは、逆説的に大学での文学部英文科の存在理由に疑問を投げかけている。形式主義の日本の教育制度に根本的な疑問を抱き、国の行く末を思い悩み心痛の念を表明している。英作文で美しい心根を表現する純朴な生徒達も、日本政府のまやかしの教育を受ければ、利己的な無情の人間になってしまうと嘆いている。政府の教育は、生徒達にとって継母のような嫌な存在で、昔の素朴な寺子屋の教育の方が遙かに望ましいと義憤を発している。

国公立学校で学んでいる者でも、全く想像力に欠け、低い語学力の輩がいるとハーンは不満をこぼし、彼等に英文学を教えることの無益さを語っている。大学の教育はペテンであるとし、特に日本の大学教育はいかさまであると嘆いている。このような教育が無益で有害でもある大学や学生に何故日本は国費を浪費しているのかと激しく糾弾している。学生の三分の一のみが、大学に在籍する資格を有しているが、残りの学生は単に時間を無駄にしているだけであると断じている。そして、優秀な学生にはより高度な教育の機会を与えるべきであり、そのための高等教育の改革が求められるべきであると彼は主張した。

また、西田への1893年３月３日付けの手紙でも、彼はハーバート・スペンサーの学説に従って、言語習得の自然な教授法では、まず最初に話し、そして書き、その後で文法を学ぶのですと述べている。このような観点から、教科書の文法規則は細かすぎて日本の生徒には無益であると考え、自分が用意してきた文法事項を何も見ずに、ひたすら板書して生徒に書き取らせることもあった。英語の教科書は西欧至上主義の教授者の好みで決めるのではなく、日本の国民性に考慮して編纂選定されるべきだと論じ、当時の文部当局の教育政策、価値観などに鋭い疑問を投げ、生徒に興味を持たせるような新たな内容の教材開発に努めるべきだとした。しかし、このような改革は文部官僚から独立してなされなければ、検閲や干渉によってうち砕かれてしまうと述べている。生徒に読ませるのに最適な教科書の不在が、日本の英語教育を不毛なものにしている。英語がほとんど話せない生徒に、ジョージ・エリオットの難解な『サイラス・マナー』を読ませる教育の無益さを切々と訴えている。学校施設に金を使うよりも、教科書開発にもっと金を使うべきだとハーンは警告している。純粋で簡潔な英語で書かれたキングスレーの『ギリシャ英雄伝』やバークの論文などを、文学的味わいと道徳的理念を教える推薦図書として彼は選んだ。

宣教師の無責任な教育とキリスト教布教が旧日本を破壊すると危惧したハーンは、また同時に教科書問題を契機に文部省に不信を募らせていた。文部省の無策ぶりと、まともな授業もしなかった前任者の宣教師を彼はペテンと非難した。そして、旧日本を破壊し新日本に突き進む熊本への幻滅が、文明批評家ハーンを生みだしたのである。

熊本でも、ハーンは英作文の授業には特に熱心に指導し、優れた答案はクラスで朗読して訂正していた。常に英作文の答案の取り扱いには細心の注意を払い、添削や批評が機械的作業に陥らないように努め、作文内容から

学生達の心理、思考、感情を捉え、そこから日本人の心や九州人の気質を読み取ろうとしていた。教育者として授業活動で得た知識をハーンは作家としての日本関係の著述に生かそうとしていた。学生に対する緻密な観察によって、西欧追随志向とは異なった、九州人の士族の魂を知り、質実剛健の伝統を彼は理解するようになる。温厚な松江の生徒と違って、熊本の学生の無骨さに最初ハーンは当惑したが、英作文を通して徐々に学生の内面的な情緒や個性を把握出来るようになる。英作文に思いがけない感情表現や独特の思考を見つけだすこともあった。このように、学生との交流を深めるために、教科書に頼らずに、英語で思想を表現することを教えるのが彼の目標であった。

ハーンは忙しい職務と著述の合間に、松江時代の教え子の英文の手紙にも愛情溢れる添削を加えて指導に努めている。前述したように、寵愛した大谷への1892年１月22日付けの手紙では懇切丁寧に、動詞、定冠詞、不定冠詞、時制、集合名詞などについて説明している。松江の職を辞しても尚、かつての教え子の英作文能力に強い関心を抱き、熱心に指導しているハーンの教育者としての姿が垣間見られる。また、クラス管理や学生指導の難しさを報告し、どのように指導し訓練していくかが教師に課せられた使命であると述べている。教師たる者は学生を良く管理して指導すべきで、不平ばかり言っている教師は管理指導能力の欠如を露呈しているだけだと断じている。

このように、熊本時代のハーンは、学校当局や文部省の教育政策に不満を抱き、終始批判の立場を貫いていたが、学生に対しては熱心な指導を愛情を持って行っていた。松江での14ヶ月間、県立尋常中学校での教職体験の後、熊本の国立学校で教えるに及んで、日本の教育界全体の事情を理解するようになり、教育制度の不備を糾弾し、学生や国の行く末を非常に心配するようになっていた。ハーンの日本の教育制度に対する批判内容は、実は今日の教育事情にもそのまま通用するような普遍性を持っていると言っても過言ではない。

（5）ハーンの書簡

ハーンは著書以外にも多くの書簡を残しているが、中でもチェンバレンに次いで多い西田宛の書簡は、約６年半程の交友の間に105通にも及び、松江を去った後も続いた両者の親密な関係を物語っている。また、推敲に推敲を重ねた著書以上に、書簡は彼の生の感情的な声を語り、分かりやすい直截な表現で日頃の不満や愚痴、外人教師としての抱負や不安、細やかな気遣いなどをうち明けており、ハーンの人間性、教師像、人生と文学を分かりやすく語っている。書簡に示された西田と松江に対する変わらぬ愛情は、松江を離れた後もますます強まり、物質機械文明に毒された熊本や東京で、日本の近代化や文部行政を鋭く批判するようになる。西田と松江を惜しむハーンの気持ちが、日本の伝統文化を愛情豊かに理解する心情を育てたのである。西田も克明な日記をつけており、両者の友情を裏付ける貴重な資料となっている。

1892年６月27日付けの西田への手紙では、熊本での居心地の悪さを自覚して、いつ解雇されても困らないように貯金する事にしたと述べ、熊本は不快な都市だと繰り返している。授業は会話、作文、講義すべて教科書なしで教えているので、週27時間は松江時代よりもきつい仕事だと報告している。板書することが多いので大変だが、学生は教科書なしを好んでいる。学生はよく勉強し優れているが、学校は兵舎のようにだだっ広い教育工場のようで、すべてが遠く離れていてお互いに親密な交わりがなく、機械的に時間が過ぎてゆき、ゆっくりする暇がないとしている。松江の中学校とは異なって、国立学校の公務員である熊本の教師と学生の間には、師弟愛とか人間的な愛情が全く見られない。政府の役人として、教職を東京の本庁への出世の手段と考え、授業はただ機械的な繰り返しの仕事として何の熱意もなく行われている。単に授業開始の合図で教室に入り、時間終了の合図で教室から出ていくだけである。事情を知る学生も教師に対する尊敬や敬愛の気持ちを持たない。国立の学校は官僚養成所であり、教師は政府の役人として教職を本庁への出世の手段と考えているので、このような教師に学生は何の尊敬の念も抱かないと彼は鋭く批判の眼を向けている。同年12月13日付けの手紙では、合理化と予算削減のために、国会に第五高等学校とその他三つの高校を廃止する提案が出されたと知り、彼は現在の外人教師の地位を失う危険性を痛感している。多額の給与で採用した外国人教師には、まったく学生を理解しようとしない者や適性を欠く人物がいたりして、必ずしも教育的効果を挙げてはいないという疑念が絶えず論議されていた。布教目的の宣教師であったり、教師としての仕事や責任を果たさない問題教師も多かった。外国人教師よりも日本人を採用するのが得策という考え方が徐々に大勢を占めるようになりつつあった。

1893年２月８日付けでは、何時解雇されるか分からない貧乏な外人教師で、日本の同僚教師からも疎んじられているとハーンは被害者意識を募らせ、３年の契約が終われば、実に不愉快な熊本を去る決心だとして、半分の給料で京都にでも移ってもいいと西田に言っている。同月19日の手紙には、熊本が嫌いな理由として、近代化、寺院や僧侶など珍しい習慣がなくだだっ広いこと、醜悪、場所に不案内で文学的題材が不足などを挙げている。しかし、妻の節子夫人がもう少し我慢して様子を見るようにと勧めている。同年８月16日京都へ移ることを考えているが、同僚となる外人教師と巧くやっていけるか不安だと言い、外人宣教師に対する根深い不信の念を表明している。

1894年７月８日付けの手紙では、教え子の小豆沢が軍人になることは、最良の選択だと認め、その将来を嘱望している。しかし、熊本での３年間の職務で神経が疲れ果て大変不幸になったとし、努力や提言が学校側から報

いられず、利用するだけで絶えず自分を排斥しようとする陰謀があったと断言し、大変孤独で生活も退屈だから、家族がいなければもう日本に止まっていないだろうと西田に心境を吐露している。

1894年３月４日付けの大谷への手紙の中で、彼は文学や言語学の研究の実用性に疑問を投げかけ、工学、建築学、医学、応用科学の分野を勉強してくれたら嬉しいと言っている。明治の日本の現状では、法律家や文学・教育関係の仕事はあまり将来的見込みがなく、科学者こそ国家的に求められている職業だと忠告している。装飾的な教育に終始している日本の大学を卒業しても、学生は何ら実用的な知識を身に付けていないし、卒業生全部が教師や法律家になれる訳でもないと現代でも通用するような言葉を発している。受けた教育が実用的でないため、実は社会で少しの役に立たないことを憂慮し、大学生の四分の三はお飾りの教育を受けたために、何事もなす事の出来ない人間になったと辛辣な意見を述べている。

価値あるものはその価値に比例して学習するのが困難であるが、文学や言語学も科学も難しいが、同じ苦労するなら金銭的報酬のはっきりした科学者の道を選択するのが賢明だと警告している。明治日本の学生に実際的学問を奨励するハーンの見解は、充分に当時の社会情勢を考慮した上での指導であった。飽満飽食の現在のような時代では、社会を揺るがす問題教師や欠陥教師の出現ばかりか、英語嫌いの英文科学生や何ら社会経験も文学的語学的見識もなく大学院を出て教壇に立つ教師が溢れている。

偉大な文学者でありながら文学者として身を立てることの困難さを痛感していたハーンは、常に実際的でない学問に進むことは愚かなことだと述べ、職のない身の上の恐怖を説き、明治日本の変革にとって、文系学生の四分の三は無益な人間になってしまうと警鐘を唱えた。専門職としての文学に対する彼の見解は厳しいものがあった。場所を転々として何度も推敲しながら物書きを志し、彼自身が苦労し独学で学んだ文学修業を思うとき、その道の険しさを誰よりも知るのは他ならぬ彼自身であった。しかし、優秀な教え子たちはハーンと同様に文学者になって大成し、彼等に多大な影響を及ぼした偉大な教育者であったことを証明している。ハーンは教師としての最も重要な資質である学生への愛情と確固たる教育理念を持ち合わせていた。時の権力に媚びへつらうことなく、また、権力者的な見地で捉えることなく、常にジャーナリズムで鍛えられた先見性をもって、学生の立場で教育方法を改善していた。曖昧な授業で終わることなく、学生の教育指導は松江時代から常にきめ細かく工夫されていた。日本の学生を愛し、日本を理解しようと努力して、授業では学生にひたすら西欧の文学や思想、歴史を語った。

生徒の実際の学力を考慮しない文部省の教科書の選定に対してハーンは文部省を鋭く批判した。学生の想像力を育成するような教科書の実現は彼の希望であった。学生が何を好み、学生にとって何を読めば良いか、自分が一番分かっているという自負の念が彼にあった。しかし、文部省は教科書問題の重要性をほとんど自覚していなかった。彼の教科書編纂の実現はまったく可能性がなかった。過重な授業負担、文部省の無策ぶり、外人教師排斥の気運、熊本を嫌悪していたことなどがハーンの挫折感を強めた。彼の厳格な教育理念とジャーナリストとしての鋭い予見力が、文部省の官僚主義からの絶縁を決意させた。文部省は予算削減のために、学校の統廃合を論議して不穏な情勢であった。彼は努力の報われなかった熊本時代の酷い扱いを文部省の陰謀だと憤慨していた。

西洋至上主義思想を生徒に植えつけようとする宣教師の教師達は、ほとんど英語を話すこともできない生徒に難解な読本を読ませていた。彼は当時の文部省に英語科教科書の改善案を具申したが、教科書改革が聞き入れられることはなかった。松江時代から一貫して、学校の教科書を不適切と判断したハーンは、熊本でも教科書を使用せずに、英作文、英会話、英文学講義などの授業を担当した。自由に英語で思考表現する指導を生徒に与えることがハーンの目的であった。生徒の心の中を知るために、ハーンは英作文では自由に思いのままを書かせ、九州人の気質を理解し交流を深めようとした。松江の生徒とは違って、幾分年長の熊本の生徒達は自己表現が少なく、話しかけても笑いもせずむっつりと寡黙であったからである。自発性もなければ非社交的であると思った生徒達と心の交流を得ていく過程は、様々な教師体験と共に『東の国から』の中に記されている。

当時の文部省に英語教科書や教育改革について提言するが、いずれも却下されたことや、西田千太郎のような良き理解者もなく孤立することが多くなり、ハーンは外人教師の身分に将来的な不安を感じていた。松江と異なって熊本はハーンの期待する日本の姿を留めていなかった事や、週27時間を教科書なしで口頭と板書だけで授業するという苛酷な重労働の日々を続けていたこと、『見知らぬ日本の面影』を完成させ、『東の国から』の原稿執筆に多忙であったことなどが重なって、彼は熊本を去る決意を固めた。著述に集中出来ないことや、学校内での外人教師としての自分の地位の保証に将来的不安を感じていたため、契約満了をもって退職し、他校からの招聘も固辞して、彼は1894年10月から月給百円で神戸の在留外国人向けの新聞社「神戸クロニクル」社で記者としての仕事に就くことにした。当時の文部当局は徐々に外国人教師から日本人の教師に切り替える方針を固めつつあった。ハーンは敏感にこの動きを察知していた。

1894年10月23日付けの西田への手紙では、熊本で受けた酷い扱いで自分は日本人になれないし、日本人から同情を得ることもないと悟った言い、また再び西洋人の仲間入りをした方が良いと孤独に打ちひしがれている。日本人を理解出来ると思った自分の愚かさを自戒している。

1895年３月９日付けでは、鹿児島と仙台から外人教師として招聘をうけたが、文部省の教育施策に不信を抱き行く決心がつかないと西田に述べている。同年7月25日

には、教え子の落合にはなるべく熊本には行かないように伝えて欲しいとか、長崎の医学部のある所は素晴らしいと述べ、暗に医学の道を勧めてみたり、大谷は文学をやるというが後悔しないことを願うと案じている。大谷は文学の創作に必要な同情的資質に欠けており、むしろこの点で最も優れているのは小豆沢で文学的感性において一番聡明であり、大谷ほどの魅力はないが観察力が鋭く本当の文学的気質を有しているとし、素朴で率直な筆致で書く小豆沢は、事物に対する感情の真実性に非凡なものを持っていると分析している。また、貧弱な食生活と健康問題については、教え子の身の安全に繰り返し言及している。

また、ハーンは文学研究について厳しい見解を繰り返し述べている。日本人にとって外国文学の研究は無益であるとし、外国文学を研究することの困難さについて触れて、正しい発音や抑揚もできない学生に、音調の強弱に基づいている西洋の詩を理解することは望めないと指摘している。西洋の社会生活を知らずして西洋の小説を理解できないのは、5年間日本に滞在している自分が、今なお日本人を理解出来ないのと同じだとしている。日本で作家であり評論家である自分の困難な立場は、西洋にいる日本人学生の直面する困難さと同様であると述べ、結局、東洋人は子供の時に西洋へ行き、完全に自分の母国語を忘れ去って、その国の風土や国民性にどっぷり浸かってはじめて、西洋文学や西洋人を理解するであろうと言っている。しかし、英国人のような考え方をする日本人は、自国内での自分の将来を閉ざされ、ヨーロッパ人のような考え方をする英国人は、英国から裏切り者扱いされると異文化理解に生きる者の困難な立場を西田に訴えている。

しかし、近代化に走る軍都熊本を嫌悪したハーンにとって、西欧文明の模倣に終始し旧日本の存在しない神戸の新開地はもっと気に入らなかった。それでも、神戸時代のハーンは、教職を辞めてもかっての教え子や親友の西田に教師として手紙を書き続けた。特に寵愛した大谷正信、小豆沢八三郎、落合貞三郎への愛情溢れる励ましや忠告は、辞しても尚一人の人間教師としての立場を堅持したハーンの真骨頂を示し、その面目躍如たるものがある。彼は気に入った優秀な教え子には、どこまでも好意を示し、その人生の行く末にまで関わろうとし、西田への手紙でも、教え子への気遣いの言葉を惜しみなく投げかけ、身の上をしきりに案じている。

寸暇を惜しんで著述に専念するハーンであったが、大切に思う者には頻繁に手紙を出した。このように、退職後も、彼は優秀な教え子の健康や食生活や将来の職業に至るまで親身になって心配していた。そして、就職に有利な進路として、教え子には装飾的な教育ではなく、科学的教育を受けて実業界に出て独立して生活する道を勧めている。文学では食べていけないし、安定した生活や将来性も望めず、終生路頭に迷うことになるという彼自身が身にしみて体験した恐怖を教え子に諭している。

ハーンは教え子から将来英文学をやりたいと相談を受けた時、法律、文学、語学よりも、実利的な科学、医学の方面へ進むように絶えず指導していた。文学は学校でなくても最善の学習が可能であると説き、日本が必要としているのは科学者であると常に強調した。松江時代から一貫して彼は実践的な教育を信奉しており、将来実際に役に立つ勉強をして、実生活で独立していけるように心がけよと繰り返し主張した。実は松江尋常中学校の西田も、天才でもない限り文学や芸術などの非生産的なものを専門職として択することの危険性を生徒に訴え、工学や医学に進むことの賢明さを説いている。ハーンは勿論、西田も文学的志向の強い人物であったが、明治を取り巻く当時の時代精神を考慮しての発言であった。また、両者共にスペンサーの実利的教育論や科学的教育論に精通しており、大いに影響を受けていた。彼等の親しい交友関係はこのような思想的親近感も根底にあった。科学万能時代においては、科学的かつ実際的な学問を学校教育において行うべきだと彼等は信じていた。文学で生きていくことの難しさを痛感した若きの艱難辛苦が、実利的で実践的な知識や学問の必要性を説くハーンの根拠となった。彼自身が来日以来、教職を生計の基盤に置かざるを得なかったのであり、文名が高まり本が出版されるようになっても、著作だけの生活に絶えず経済的不安を感じていた。実際に役に立つ応用科学を勉強して、日本が必要としている専門的な科学者になれというのが、ハーンの教え子に対する口癖のような忠告であった。

法律家や文学者や教育家よりも、電気技師、建築士、医師、科学者こそ、明治の日本が最も必要としている人材だと寵愛した教え子大谷正信への1895年３月８日付けの手紙の中で彼は執拗に忠告している。どうしても文学の道を進むという大谷に対して、昔の本よりも現代作家を読んで、あらゆる偉大な文学作品に流れている感情や情緒の動きを学びなさいと忠告している。文学は人間の崇高な感情を喚起するものであると述べ、最終的には英文学の研究から日本文学に寄与するような考え方に立って勉強して欲しいと希望している。英語での文学的行為は、どの様な観念でも表現できるくらいの熟練した英語力がなければ、実際の役には立たないので、日本で英文学を教えるのは大変な冒険だと言っている。同年６月28日にも文科よりも理科へ進学するように繰り返し忠告している。

（6） 東京帝国大学での英文学講義

その後、３番目に就いた教師の職にハーンは、松江や熊本よりも一番長く勤めることになる。東京帝国大学文科大学（現在の東京大学文学部に相当）の英文学講師に就任した彼は、実に精魂を傾けて熱心に授業を続けて、明治29年９月から36年３月に至る６年半にも及んで学生の指導に励んだ。当時の帝大文科大学学長外山正一がハーンの著書を高く評価して、是非にと大学に月給四百円で招聘したという経緯があった。東京帝大講師の話が来

たとき、以前の熊本のような休む暇もない苛酷な労働条件では行く気になれないと難色を示していたが、外山学長やチェンバレンの丁寧な説明で納得し、週12時間の条件で承諾した。正規の高等教育を受けず全くの独学であったハーンが、高収入で日本の最高学府の教壇に立つには外山の先見の明による決断があった。ハーンの東京帝国大学での英文学講義は職人的作家としての創作経験を取り入れた、親切で分かりやすいもので、文学の世界に学生達を誘う熱意に満ちていたため、多大な感化力を発揮して高い人気を博していた。

しかし、東京帝大でも多くの学生が思った程に真面目でなく、ただ試験に萎縮するばかりで、学力不足で熱意もないので、多くの者は大学への入学を許可されるべきでないと嘆き、英語力も他の外国語の能力も低いのは、高等学校での教育にも問題があると教育制度に彼は疑問を投げかける。英語を満足に５行として書けない学生がいるので、教育制度の改革が必要だと西田に1896年12月18日付けの手紙で訴えている。月給四百円の仕事には乗り越えるべき多くの失望や障害があるもので、自分勝手にしている学生を教えるという困難な仕事に不平ばかり言ってはいられないと自らを慰めている。しかし再び、75パーセントの学生は大学へ来るべきでない者達だと辛辣さを究め、フランス語しか知らない者がドイツ語の言語学の授業に出たり、西洋の言語を全く知らない者が言語学の講義に出ている大学の実態に、彼は大いに失望と疑問を投げかけている。それでいて、難解であるが故にミルトンの『失楽園』を選択する学生の気質にも訝っている。読本ばかりでなく、英作文でも難しい単語や複雑な長文を使いたがる学生の傾向は、現在でも尚存在している。

大学は多くの学生にとって実社会への単なる通り道になっており、勉強せずに通り抜けられるものなら授業にさえ出席しない。このような学生の将来は暗く、勉学の精神は死滅しているとハーンは日本の教育の現状に嘆いている。このような大学の有様が実社会への登竜門になっていることが大きな誤りであると言っている。また、几帳面なハーンにとって、学生らしい服装は何よりも望ましく、学生服や帽子の身だしなみのだらしない学生が多く、規律が乱れているとも嘆く。

英作文の授業では、ハーンは作文の添削をした後、優秀者に対しては褒美として賞金や賞品を与えた。この報償制度は教師を始めた松江時代から引き続き行われてきたものであるが、彼の蔵書や賞金を与えたり、学生の注文に応じて書物をアメリカへ注文することもあった。教師時代を通じて一貫して彼の報償する優秀者とは、単に誤りのない完璧な英語を上手に書いたためではなく、型にはまらず自由に独創的な思考を表現した学生を意味していた。300枚もの答案に目を通し、一日がかりで賞品の荷造りや発送をしていた。賞品はホーソンやポーの全集であったり、五十円や三十円を賞金として与えていた。その判定基準はbest Englishではなくbest thinkingによる。英語の単に上手な作文ではなく、日頃の研究や自分の意見を示しているような最良の思考表現をした英作文に彼は賞を与えた。ハーンによれば、英作文は文法や修辞的規則ではなく、言わなくてもよいものを知り、効果を集中させて他人の模倣を避けて、自分の個性を発展させる芸術的規則によることが肝要である。練り抜かれた表現が示す圧縮力と洗練さを英作文に求め、表現の圧縮と思考の構築を調和させて統一的構成をもたらすように心がけるべきだとした。

東京帝大での英文学講義は、やはりテキストを使用せず、ゆっくりとした英語の口述と分かりやすい説明であったため、学生は逐一講義内容を筆記することができた。このようにして書き残された講義録は、コールリッジの文学批評に匹敵すると高い評価を与えたコロンビア大学教授のJ.アースキンによって、校正編集されて著書として出版された。講義録が出版されることについては、原稿も下書きさえもない口頭による講義なので出版には価しないだろうと述べ、10日か15日ぐらいかけて書き直しすれば出版できるが、それほどの価値もないとハーンは謙遜していた。しかし、この講義は当時の東京帝大の学生には申し分のないもので、ハーンは日本での長い教職経験から学生の考え方や感じ方に合わせて、出来る限り簡単な英語で説明している。

彼の講義は非常に生き生きとした具体的表現や具体例を駆使して、実践的に職業作家の視点で行われた。誇張的表現も散見されるが、分かりやすく懇切丁寧に学生の想像力に訴えかけるように文学の世界を解説している。文学の面白さを説明して学生に関心を持たせるために、学生に問いかけ考えさせるような口調が講義の特徴であった。美しい声の持ち主であったハーンの講義は、耳を打って快い楽音のように学生を陶酔させ、佳境に入ると彼の声は熱をおび調子も高められてくる。学生は夢心地の内に懸命に筆記するペンを走らせつづけ、授業が終了すると、緊張の夢から醒めてほっとするのである。あとで筆記した講義ノートを読み返すと、何気なく語られた講義の言葉がすべて美しい名文になっているのに学生たちは感嘆した。文学研究家ハーンが、詩人的特質を豊かに備え、文章表現や文学の言葉に如何に優れていたかを垣間見る逸話である。

万全の準備をして授業に臨んだハーンは、文学的名文はすべて暗記しており、教壇に立つと天才的詩人のように、人名と年月日の確認のための小さなメモ帳一つで、文学史でも文学評論でも何も見ずに口述できた。[14] 口述に際しては、コロンの位置から改行に至るまで指示しながら、学生に講義内容を筆記させていた。長時間でも椅子に座ったりもたれたりせずに、澄み切った美しい声で、流れ出るように講義を口述したという。

松江時代から11年間にも及ぶ教師生活において、彼は一貫して誠実な先生として教え子に深い愛情を示した。既述したように、教え子の健康や食生活を心配したり、文部当局の教育制度を批判し、当時の日本の現状を考慮して、学生に科学や実業の方面に進路を取るように勧めていた。優秀な学生には心優しい気遣いを示し賞品を与

え、日本研究の調査を手伝わせた大谷には、報酬を与えたり学費の援助もした。反面、能力もやる気もない学生には厳しく、高等教育を与えるのは国費の無駄遣いだと決めつけ、学生の三分の二は入学すべきではない者達だと厳しく叱責した。

英文学について多くを知っていると自慢できる程ではないが、原稿や本もなしで英文学全般の歴史を講義することはできると述べたハーンは、自分のアカデミックな方法論での限界と現場の作家としての長所とを的確に把握していたと言える。正規の高等教育を受けず、独学の人であった彼は、自分の学識不足にも謙虚に気づいていたが、最も得意とする作家的立場から、文学を感情や情緒表現、人生の描写として教えることに努めた。詩は詩人の発する感情の質や力で説明しようとし、学生の想像力や感情に訴えかける教授法を取り、学生の評判も良かった。最も独創的な講義録は、『人生と文学』としてまとめられている。それでも、冷静なハーンは学生の想像力が日本的なものであり、西洋的な想像力とは本質的に異なっているので、実際にはどの程度意味があったのか疑問も残るとも言って、あくまでも冷静な批判精神を維持していた。

東京帝大で６年半英文学を教えたが、文学の情緒的側面と近代思想を関連づけて教え、彼は常に従来の方法とは異なった教授法を考案した。また、彼の英文学講義は親切で平易であり、著書の執筆に多忙であったにもかかわらず、６年半で一度として同じ内容を繰り返すことがなかったもので、学生に与えた影響は大きく日本の英文学研究の基礎を形成している。ハーンは近代思想ではスペンサーに思想的影響を受け、情緒的側面ではロマン主義文学の影響を受けていた。偉大な学者ではないかもしれないが、心から文学の味わいや楽しさを伝授するような親しみの溢れた優れた教育者であった。

文学の普遍性に触れて、真の詩は想像、情緒、熱情、思想であるから、力と真実を有し、言語の特異性や価値とは関係がないと彼は断じる。文学芸術は現実と想像の事象との巧妙な結合であり、生の生硬な真実ではないのは、写真が絵画と比較できないのと同様だとし、生の真実は科学が要求するものであり、文学芸術の対象は美に他ならず、美であるかぎりにおいて真理を含むものであると論じている。

東京帝大での勤務状況では、ハーンは大学へ着くと、同僚学者達のいる教官室には入らず、真っ直ぐに教室に行くのを常としていた。講義の合間の休憩時間も、池の辺りで煙草を燻らせて逍遙していたという。雨が降っても休憩に教官室へは行かず、そのまま教室で黙して窓から景色を眺めていた。元来、彼は親しい友と以外はうち解けず、派手な社交を好まず、孤独を愛する風情があった。良き理解者であった外山学長の死後、同僚の外人教師との親交を避けていた彼は、学内でも孤立無援の状態に陥った。一片の解雇通知で帝大辞任に追い込まれたことにハーンは激怒したと伝えられている。献身的に授業に精魂を傾けてきたことが、忘恩的に冷たく切り捨てられたことで、彼は大学側に猜疑心を抱き、被害者意識を募らせて、その後の学生の留任運動や井上哲次郎学長の要請を頑固に断って辞任する。学生達はハーンの人柄や素晴らしい講義の内容を惜しみ熱心に留任を働きかけたが、一徹者のハーンは辞任の決意を翻すことはなかった。

東京帝大での在職期間が最も長く、また日本の最も優秀な学生を指導したこともあり、この時期に優れた教え子が数多く輩出した。ハーンの教え子たちの中には、後に英文学者や俳人、詩人になった者が多く、上田敏、土井晩翠、戸川秋骨、大谷正信、落合貞三郎、田部隆次などの著名人が世に出た。英文学者で評論家として著名な人物は数多いが、中でも、「海潮音」で有名な上田敏、不朽の名作「荒城の月」の作詞者である土井晩翠、チャールズ・ラムの研究や翻訳を手がけた戸川秋骨、ハーンの伝記を纏めた田部隆次などは特筆すべき人達で、ハーンの著作の翻訳や業績の評価確立に貢献した。

東京帝国大学を退職して後、坪内逍遙の招きで明治37年３月に早稲田大学で教鞭を取ることになる。ハーンは英文学の講義を急逝するまで6ヶ月間行った。ハーンは同じ講義をただ繰り返すような安易なやり方をせず、早稲田でも常に新たなメモ書きを用意して講義に臨んでいた。しかし、同年９月にハーンが急逝したため、胸躍らせた学生達の期待を集めた講義は長く続かなかったが、英文科の教え子には、児童文学で有名な小川未明、英文学者の日高只一などがいた。ハーンの教師生活は明治23年９月の松江の尋常中学校赴任から明治37年９月に54歳で急逝するまで、14年間のうち神戸クロニクルの記者をはじめて眼病のため数ケ月後に退職する神戸時代を除いて、11年間を著作の執筆に従事しながら、生徒と心の交流を果たす英語教師として、また職人作家としての経験から文学の創作と東西文化を論じる希有な英文学教師として、日本の教育と文学の発展に大きな足跡を残したのである。また、ハーンの描いた日本は、神秘に包まれた美しい幻の国で、現実の新日本を外国に知らせることにならないかもしれないが、彼は旧日本に自分の文学の表現を見出し、伝統的な日本の心を世界に紹介したのである。

（7） ハーンの今日的評価

ハーンは明治日本の面影を伝える希有な作家として日本では根強い人気があり、現在でも着実な読者層を保持している。特に明治23年８月から１年２ヶ月程滞在した松江では、文豪として敬愛をこめてヘルンさんと呼ばれて大切に扱われて、八雲記念館や旧居なども整備され、人気の観光資源となっている。これほど日本人の心を捉えて離さない外国人作家は珍しいと言える。日本での高い評価に対して外国では必ずしも高くないハーンの評価は、日本の国際社会での地位の上昇や下落と共に大きく変動した。中国にうち勝った日清戦争や大国ロシアを破

った日露戦争当時、世界中が日本に注目し新興国日本を紹介する書物として、彼の著書は各国で翻訳され大いに読まれた。その後第一次世界大戦まではおおむね国際社会で好意的に日本が受け入れられていたのでハーンの作品も好評であった。

しかし、軍部の独走と共に、軍国主義の帝国日本に対する国際社会からの非難が集中するようになった。特に先の大戦では敵国日本の事情を研究するために利用されたが、大戦後はハーンも裏切り者扱いで評価は極端に下落し、その後の西洋のアカデミックな日本研究者達からもジレッタントとして無視されていた感がある。ライシャワーやベネディクトなど歴代の著名な日本研究家達もハーンについては一切触れなかったようだ。当初は東京帝大教授のB.H.チェンバレンと同列の日本研究者としてハーンは定評があったが、日本を取り巻く世界情勢の変化と共に、日本に対する敵対的評価と連動して西洋での彼の評価は低下していった。日本の幻想に耽溺し正確な客観性を欠いたロマンテッィクな著述家として、学者的な日本研究家から軽んじられるようになった。太平洋戦争後、対日占領政策に参画した日本語通訳者や日本解釈者が日本研究家として学究的学者の地位を固めるにつれて、ハーンの西洋での評価は極めて低いものとなった。親交の深かったチェンバレンもハーンと疎遠になって以降、『日本事物誌』第６版で彼について悪意に満ちた評価を下している。40歳で新天地を求めて来日し、日本に異常な程陶酔して神々の国と絶賛したが、彼の『見知らぬ日本の面影』は現実の日本ではなく、彼が勝手に見たと思いこんだ日本の幻想を描いたに過ぎないという非難である。その後、このような意見がハーンの評価を押し下げる論拠として西洋では定着した感がある。

一方、日本では西洋の動きに反比例するように、当初英語でのみ読まれていた著作が、全て日本語に翻訳されて根強い人気を博してきた。戦後の日本の国際的地位の向上に伴い、西洋でもフランシス・キングやジェイムズ・カーカップなどを中心にハーンの再評価の気運が高まりつつある。ローエル、ロティ、キプリング、ベネディクト、ライシャワーなど多くの日本研究家の中でも、ハーンほど日本で愛読され親しまれている作家はいない。誠実なハーンの教師像や推敲に推敲を重ねる彼の慎重な著述姿勢は、チェンバレンの非難の不当性を際だたせている。

ヨーロッパ時代にイギリスやフランスの寄宿学校で受けたひどい教育は、松江、熊本、東京でのハーンの教師像に大きな影響を与えた。キリスト教主義の下で行われた非人間的な教育に彼は猛烈に反発し批判した。寄宿学校の厳しい規則や劣悪な環境は、そこへ送り込んだ厳粛なカトリック教徒の大叔母の思い出と共に、彼を極度のキリスト教嫌いにさせた。西洋至上主義思想を生徒に押しつけるような英語教科書や宣教師の傲慢さを彼はひどく憎み、教科書を使用しない独自の授業を工夫し、生徒や学生の自由な想像力と独創性を大切に育成しようとした。

ハーンは16歳という多感な時期に片目を喪失したために、以後不幸な運命と闘い艱難辛苦の人生を歩むようになり、放浪生活やどん底生活を身をもって体験し、波瀾万丈の生き様から数多くの人生経験を積んでいた。両親の離婚によって自らに課せられた辛い人生の艱難辛苦を考えれば、ハーンが1893年４月17日付けのチェンバレン宛の手紙の中で、全て教育の目標とは、ひたすら良き父親と良き母親を育成することに尽きると看破したことは、不幸な生い立ちを知る者にとって実に意味深い含蓄を含んでいる。[15] 彼が教師としてまた作家として示した弱者に対する同情、共感、優しさは、このような艱難辛苦の人生から生まれた彼の人生観や人間観と密接に関係している。想像力の教育によって、教師と学生との間に、魂の響き合うような交流なくして教育の目的は達成し得ないのである。教育や文学を通して自分自身を表現し、相手に親密に語りかける教育者や文学者として、さらに作家や批評家として、常に学生や読者の心に語りかけ、訴えかけるように想像力や物語の世界を語り、英語教育や文学講義に献身してきた彼の業績は、人生のあらゆる辛酸を舐め尽くした人間の技量と力量であったからこそ成し得たものであった。

注

(1) E.スティーヴンスン『評伝ラフカディオ・ハーン』（遠田勝訳、恒文社、1984）p.47.
O.E.フロスト『若き日のラフカディオ・ハーン』（西村六郎訳、みすず書房、2003）p.80. 左眼の損傷について、ハーン自身は縄の端の結び目に打たれたのでなく、喧嘩相手に拳で殴られたと思いこんでいたという。

(2)『島根評論』西田千太郎先生追悼号（第12巻16号、昭和10年）p.12-14.
広瀬朝光『小泉八雲論』（笠間書院、昭和51年）p.239., p.281.

(3)『座談会旧師八雲先生を語る』（島根県立松江中学校英語科、昭和15年）p.50.

(4) 小泉八雲『明治日本の面影』（講談社学術文庫、1990）p.20. この八雲名作選集では、『見知らぬ日本の面影』上下２巻の原著の約四分の三の作品を『明治日本の面影』と『神々の国の首都』の2冊に分けて収めている。

(5)『座談会旧師八雲先生を語る』p.41.

(6) 同書、p.44.

(7)『明治日本の面影』p.67.

(8) 同書、p.33.

(9) 根岸啓二『出雲における小泉八雲』（小泉八雲旧居発行、昭和５年）p.97.

(10)『島根教育』（345号、大正11年月11号）p.2.
『英文学研究』（東京帝国大学英文学会、第5冊、大正12年）p.7.
講演の英文の原稿は市河三喜博士の探索にもかかわらず結局発見されなかった。翻訳文は、通訳した西田が病気がちと多忙のため、代わって同僚の中村鉄太郎が行ったものである。

(11)『明治日本の面影』p.54.
(12)『ラフカディオ・ハーン著作集』第14巻（恒文社、1983）p.231.
　書簡については年月日で内容を各々確認できるので、全部についてそれぞれ注をつける事はしない。
　cf. *Lafcadio Hearn Life and Letters* 2vols.by Elizabeth Bisland (1908, Houghton Mifflin)
(13) 小泉八雲『光は東方より』（講談社学術文庫、1999）p.41. 邦題は『東の国から』,『東の国より』など様々である。
(14)『出雲における小泉八雲』p.107.
(15)『ラフカディオ・ハーン著作集』第14巻　p.550.